

研究・調査報告書

報告書番号	担当
274	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Obesity, smoking, alcohol consumption and years lived with disability: a Sullivan life table approach. 肥満、喫煙、飲酒と障害余命の年数：サリヴァン(Sullivan)生命表によるアプローチ	
執筆者	
Bart Klijs, Johan P Mackenbach and Anton E Kunst.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
BMC Public Health 2011, 11:378	
キーワード	
障害余年、サリヴァン生命表、喫煙、肥満、飲酒	
要 旨	
<p>背景・目的： 人口の高齢化による QOL の著しい低下を避けるため、そしてヘルスケアシステムの持続可能性を確実なものにするため、高齢者の障害（病気や寝たきり）という負荷の低減が早急に必要とされている。生活習慣への介入は 1 つ以上の障害を持って生きる年数を減らすのに役立つと思われるが、どの生活習慣の因子がそのような減少に大きくかわる可能性があるのかは完全に分かっていない。ゆえに、この論文の主要な目的は、サリヴァン(Sullivan)生命表法を用いて、BMI、喫煙、飲酒の障害余命への影響を比較することである。第二の目的は、障害（病気や寝たきり）と寿命との関係に関する情報を使用することで、サリヴァン法の改善の可能性を評価することである。</p> <p>方法： 2006 年までの死亡のフォローアップを行った 1997～1999 年の Dutch Permanent Survey of the Living Situation (POLs)からのデータ(N=6,446 人)が使用された。リスクファクター曝露による推定相対死亡リスクを使用して、分割生命表が BMI、喫煙状況、飲酒量によって定義されたグループとして作成された。年齢やリスクファクター曝露と関連において ADL や身体障害の有病率を予測するにはロジスティック回帰モデルを用いた。サリヴァン法を用い、推定された年齢特異的な有病率は生命表において計算された 55 歳での障害余命年数を含んだ。さらなる解析で、我々は回帰モデルと生命表予測の両者における余命に関する付加情報が、結果の本質的変化につながるかどうかについて評価した。</p> <p>結果： 55 歳での余命は、BMI によって定義された群間で 1.4 年、同様に喫煙状況で 4.0 年、飲酒で 3.0 年異なった。障害余命年数は同様に BMI で 2.8 年、喫煙で 0.2 年、飲酒で 1.6 年異なった。肥満者は、喫煙者(3.8 年)や飲酒者(3.1 年)よりも長く障害を持って生きる(5.9 年)と予想された。死亡時の雇用時情報により、推定障害余命は短くなり、BMI(2.1 年)、アルコール(1.2 年)と喫煙(0.1 年)による障害余命の差は小さくなった。</p> <p>結論： 喫煙や飲酒と比べ、肥満は長い障害余命年数過ごすリスクの増大に最も強く関連している。障害と余命との関連に関する雇用情報がサリヴァン(Sullivan)生命表の推定の正確さを改善するにも関わらず、リスクファクターの相対重要性は変わらないままであった。</p>	